

編集後記

二〇年も前の話であるが、奈文研の先輩に、「文化財関係の新聞記事を論文の注に引いてはいけない」というアドバイスをもたらたことがある。記事は情報収集の手がかりにはなるが、必ず調査機関の報告書を確認し、それによるべきであるという当然の指摘であった。ほどなく自分が発掘成果を報道発表する場面に立つようになり、発表した内容と記事との差異を痛感し、納得したことであった。しかし、当時は新聞を引用しようという気にさせるほどの、正確な記事がまだ多かったように思う。

それに対して、最近の記事の不正確さは目に余ると感じるのは、私だけであろうか。原因はいくつかあろうが、現場に足を運んで、独自に取材をして記事を書く新聞記者が減ってしまったことが大きいように思われる。厳しいことを言えば、下準備もなく発表を聞き、記者の理解した範囲で記事にしているだけではないのか。調査担当者がいかに丁寧に報道発表しても、記事に反映しないとすれば、それは由々しき事態ではなからうか。

愚痴が長くなったが、右のような状況の中で、本誌の役割は益々大きくなる、ということを書いたかったのである。全国各地の報告書を個人で閲覧するのはとても困難であり、木簡に限った情報ではあるが、調査担当者による執筆を原則とし、情報を網羅すべく努力

を続けてきた蓄積は、自賛しても良からう。もちろん、全国で発掘調査に従事しながら執筆して下さる方々をはじめ、会員各位に支えられて、四半世紀を越えたわけである。

本号にも、全国から八五件におよぶ情報が寄せられた。その中には、昨年刊行の『総覧』によって明らかになった、既発掘で本誌未報告のものが多く含まれている。本号に掲載がかなわなかった分は、次号以降の掲載につとめ、順次、積み残しを解消してゆきたい。

論考については、昨年度の大会で報告されたシンポジウム「中国簡牘研究の現状」の記録として、報告者の方々に原稿をまとめていただいた。近年は、中国簡牘の出土情報が比較的早くに伝わってくるようになったが、こうした内容にわたる紹介は、日本木簡研究者にとっても有益で、有り難い。榎山明・前委員をはじめ、シンポジウム開催に尽力された方々に感謝したい。

本年度から、委員の中での職務分担を明瞭にし、会誌編集には、委員のうち、八名が主としてあたり、編集代表もその中から交替で担当することとなった。もともと実務・諸連絡等にあたっては、本号の場合、渡辺晃宏委員に依拠するところが大きかった。奈良文化財研究所の委員の負担をできるだけ少なくするようにとの思いはあるが、ある程度はやむをえない部分もあり、難しいところである。

今後も委員一同、努力を続ける覚悟であるが、会員の方々も情報収集等でのご協力を切にお願いしたい。

(寺崎保広)